



Title	北大天塩演習林を中心としたエゾヒグマの生態調査の経過と道北地方の個体群について
Author(s)	青井, 俊樹
Citation	北海道大学演習林試験年報, 1, 2-3
Issue Date	1984-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/72631
Type	departmental bulletin paper
File Information	1982_1-1.pdf



I-1 北大天塩演習林を中心としたエゾヒグマの生態調査の経過と道北地方の個体群について

青 井 俊 樹

森林はそれ自体一つの巨大な生物社会である。そこで、樹木をはじめとし、その中に生息する種々の生物の相互の関りや生活様式を知るとは森林そのものの理解に必要なものと言え、各種森林動物もその一面として位置づけられよう。また一方、近年とみに自然、野生に対する市民の要望が多様化してきており、とりわけ北海道にしか生息しない我国最大の陸上動物であるヒグマの実態解明は、その点からも強く望まれるようになってきた。

それは例えば大雪山のケイコをめぐる一連の話題、あるいは道自然保護課がオリによるクマ猟の禁止を全国に先がけて行うなどの事例にもあらわれているように、ヒグマをめぐる社会情勢は大きく変化してきている。

しかしその反面正確な道内の生息数が減っているのかあるいは増えているのかも不明であり、また一方では減少を心配する声が出ているというのが現状と言える。

筆者らは、これらの問題点をふまえて、北大ヒグマ研究グループのメンバーらと共にヒグマの調査研究を継続してきた。

今回は天塩地方演習林を中心として行ってきた生態調査の経過を簡略に説明し、また同林をベースに現在行っている道北地方一帯におけるヒグマの個体群の調査に関して若干報告する。

天塩演習林では1975年よりヒグマの生態調査が開始され、毎年のべ500~600名程の人員によって遂行されている。調査開始当初からの目的としていくつかあげられる。

それらは、ヒグマの生息数推定方法の開発とそれによる演習林内のヒグマの生息数の推定、食性の季節変化、行動範囲の推定と生息環境の把握などがおもなものである。

生息数推定は足跡を利用して行なう方法をとっている。それは厳寒期をのぞく通年の調査の中でも、夏と春の一時期約10日間に、30名前後の人員が一度に入山し、徹底的に足跡をさがし出し、前掌巾の計測値の違いによって個体を識別して生息数を導き出す方法である。この方法によりかつては毎回10頭前後が演習林で確認されていたが、最近では3~4頭に減ってきている。

次におもにクマの糞の採集分析、及び食痕調査等から食性の概要と季節変化がつかめてきた。彼らの食物は圧倒的に植物質が多く、90%以上を占めている。春から夏には主として草本類を、秋には漿果、堅果類を食べており、動物質ではアリ、スズメバチなどである。

さらに、ヒグマの行動域、あるいは日周活動を知るための方策の1つとして電波発信器装着個体によるテレメトリー調査を試みている。まだ完全に軌道に乗る所まではいかず、成果は今後に期待されるところである。

次いで、現在力を入れて行っている道北地方におけるエゾヒグマ個体群の調査について簡略に述べる。すなわちそれは、道北地方に生息しているヒグマは、今どのような状況におかれ、今後どうなっていくのか、そして我々人間は今後どう対処して行けばよいのかなどという点について、年齢構成や繁殖の状況などから考察するものである。

アメリカなどでは、数十頭という多数個体を生け捕りして記号をつけて放逐し、長期間その行

動を追うといった事から、きわめて詳細な調査を行っている。しかし残念ながら我国ではまだその域までとても達していない。

そこでハンターによって捕獲された個体をできるだけ多数調べることによって類推するという方法が一つの有効な手段として考えられる。

その具体的方法としては、道北地方のハンターを1人1人回って調査協力をお願いし、ヒグマが捕獲されたらすぐその頭骨を借り集めるところから始まる。頭骨から歯を抜き取って、その根元から極めて薄い切片を作製し染色すると、そこに年輪が観察できるようになる。この年輪を数えることによって正確な年令を知ることができるわけである。この方法を用いて道北地方(雄武、名寄、羽幌を結ぶ線以北)で捕獲されたヒグマ95頭を精査することができたのでその結果を以下に述べる。

まず雄雌の割合は3:2で雄の方が有意に多かった。また獲られかたのパターンからいうと親子連れによる捕獲が全捕獲数の33.7%とかなり高い割合を占めていた。

次に年令構成を見ると、0歳から3歳までで全体の44.2%、4歳まで含むと56.8%となり、実に半数以上が4歳以下で占められており、若令個体に非常に高い狩猟圧がかかっていることがうかがわれる。とりわけ若雄の割合が高く、満2, 3, 4歳の雄だけで全雄の50.8%にもおよんでいた。

この年代の個体は、いわゆる分散個体といわれるもので、親から別れて間もないため新たな生息域を確立する必要がある、広範囲を歩き回ったりあるいは春早くに穴から出て来るなどの活動性の高さが、高い捕獲割合につながっていると考えられる。しかしそれにしても極端に割合が高すぎ、調査地域内だけで考えていたのでは説明がつけがたい。そこでまだ一つの推測でしかないが、この調査地域は全道的にながめても最周辺部であり、ヒグマの分布の中心とも言える地域(天塩岳から大雪山系にかけてと考えられる)からの若グマの分散移動があるのではないかと予想される。

次に年度別捕獲個体の平均年令を見ると、ここ数年どんどん若令化の傾向が見られる。

アラスカのクロクマの調査例では、今まで狩猟が行なわれていなかった地域で狩猟が開始されると、初めは老令個体が多くとられ、狩猟がおしすすめられるにつれて若いクマが多くとられるようになると報告されている。その点で見ると、道北地方のヒグマは、狩猟がかなり過度におしすすめられた結果、全体に若令化し、そこに中央部から若干の移動によってまだ捕獲数がある程度たもたれているといった図式が一つ考えられるようである。

演習林における長期間の痕跡調査によると、ここ3~4年の間に痕跡発見率が急速に減少しているという結果(表)もあわせて、道北地方のエゾヒグマ個体群は、危機的な状況におかれていると予想される。

表 北大天塩演習林におけるヒグマの食痕発見率 (1976~1983)

年	オオブキ	ザゼン ソウ	ミズバ ショウ	エゾ ニユウ	オオハ ナウド	エゾイ ラクサ	他	被食個体 数計 本	調査距離計 km	1 km当り 発見率
76	3,634	76	9	1				3,720	256.1	14.5/km
77	2,081	114	62	18		1		2,276	242.9	9.4
78	359	87	47	3				496	163.9	3.0
79	1,601	67		10	9		2	1,689	369.8	4.6
80	28	46		3				77	277.8	0.3
81	87	100		9			2	198	137.2	1.4
82	20	3	26	1			9	59	218.6	0.3
83	1	4		2			10	17	148.5	0.1